

## 「環境に良い」「地方を元気に」に根拠はあるのか

地球温暖化などの環境問題や地方の過疎化などの社会問題を解決するための取り組みを行うときに、その取り組みが具体的に「効果があるのか/ないのか」、「効果はどのくらいなのか」がわからなければ、その取り組みを本当に進めて良いかどうかの判断ができません。

当たり前のことのように聞こえますが、実際のところ、社会には効果があいまいまま取り組みが実行されている事例がたくさんあります。その取り組みは本当に環境にやさしいのか、または地方を元気にすることができるのか、根拠と効果を明らかにすることは基本でありとても重要です。

## 木材の公益的価値の定量化

効果を具体的に表すことを「定量化」といいます。

環境問題の取り組みを定量化する手法として、「**ライフサイクルアセスメント(LCA)**」があります。この手法を使うと、例えば国産材で住宅を建てることでどのくらいの**温室効果ガス(CO<sub>2</sub>など)**が大気中に放出されるのかを数値化することができます(図1)。この計算には木材の生産・輸送・使用・廃棄など全ての過程(ライフサイクル)が含まれます(図2)。

地方の過疎化などの社会問題については、「**産業連関分析**」という手法を使って、**経済波及効果や雇用の増加数**などを推計することができます(図3)。

このような手法を使、木材(特に国産材、地域材)の利用を進めることの地球環境や地域経済に与える影響の定量化、最も効果の高い(またはバランスの良い)取り組みの検討などを行っています。

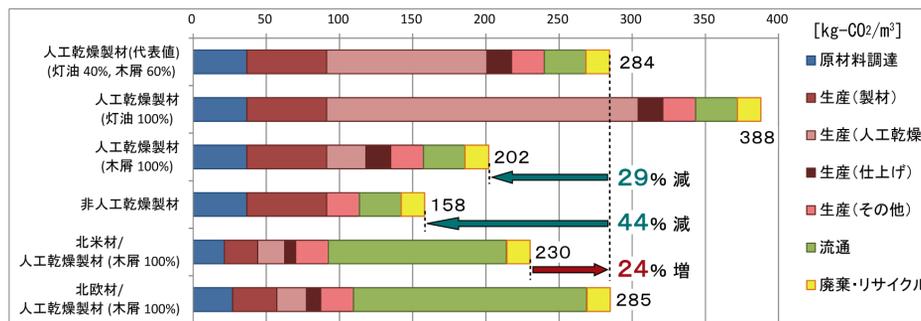


図1: 地域材(京都)と輸入材のライフサイクルCO<sub>2</sub>

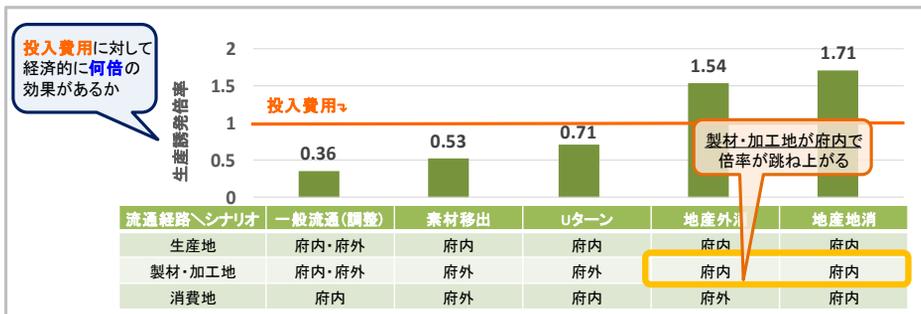


図3: 地域材(京都)の利用による地域への経済波及効果(流通シナリオ別生産誘発倍率)

図2: 木材のライフサイクル

